

助詞「まで」の接続機能*

－「まで」の副助詞性について－

韓鐸哲**
tchan@tu.ac.kr

〈目次〉

- | | |
|----------------|------------------------|
| 1. はじめに | 3.4 「まで」の接続 |
| 2. 研究目的および先行研究 | 4. 動詞連体形+「まで」 |
| 3. 「まで」の用法 | 4.1 意味 |
| 3.1 格助詞用法 | 4.2 機能 |
| 3.2 副助詞用法 | 4.3 体言+「まで」と動詞連体形+「まで」 |
| 3.3 他の助詞用法 | 5. おわりに |

主題語: まで(MADE)、副助詞(adverbial particle)、格助詞(case particle)、動詞連体形(predicates)、接続(connection)

1. はじめに

日本語において、助詞の役割は、事柄と事柄との論理的関係を示したり、事柄に限定をえたり、事柄に対する疑問や感動を示したり、あるいは意味を添加したりして文としての表現をより明確にするため、欠くことのできない要素である。このように助詞は文の表現において非常に重要な位置を占めていることが分かる。本稿では、その中でも幅広い意味機能を持っていると思われる「まで」について考察してみる。

一般に、助詞「まで」は品詞分類において格助詞または副助詞あるいは他の助詞¹⁾(限定助詞、順序助詞、強調助詞、特立助詞、とりたて助詞、形式副詞など)として分類され、しば

* 이 논문은 2016학년도 동명대학교 교내학술연구비 지원에 의하여 연구되었음.(2016F092)

** 東明大学校 日本学科 副教授

1) 他の助詞とは違って、「まで」は助詞の下位分類において多様に分類される特徴が現れる。

2) 奥津敬一郎(1966)「「まで」、「までに」、「から」—順序助詞を中心として—」では、格助詞以外に順序の終点の助詞、強調の助詞に分類している。

沼田善子(1986)『いわゆる日本語助詞の研究』で、「まで」の機能、特徴により、格助詞以外に順序助詞、形式副詞、とりたて詞のように4つのカテゴリーに分類している。

しば品詞分類上の論点になっている。確かに「まで」には次の例のように2つの用法がある。

1. 格助詞用法：8時まで働く。東京まで行く。
2. 副助詞用法：彼まで来た。命まで捨てると思わなかった。

1の「まで」は客観的に時間や場所の限界点を示す格助詞の用法として用いられている。一方、2の「まで」では、叙述内容に対する話し手の主観的態度が表現され、ムードと係る副助詞用法として用いられている。すなわち、「まで」は、意味的分類に対応して、格助詞の用法と副助詞用法に分かれる用法の違いが現れる。つまり、二元的に分類される特殊性がみられる。

本稿では二元的に分類される「まで」の接続関係を中心に調べ、格助詞との接続の相違を検討し、「まで」の副助詞性を明らかにする。

2. 研究目的および先行研究

「まで」についての研究は多くの学者たちによって行われてきた。藪崎(2002)は「まで」の用法を格助詞性に焦点をあてて考察した結果、「移動の到達点」、「空間量」、「時間量」、「変化の程度」、「状態の程度」、「包含」、「反期待」の七つに分類してこれらの七つの用法のうち、「移動の到達点」、「空間量」、「時間量」の「まで」は他の格助詞と異なる統語的特徴があり、格助詞とは言い難いと言っている。韓(2010)は「まで」の統語的機能および意味について考察し、「まで」には格助詞・順序助詞・特立助詞・副助詞・他の機能があることを明らかにしている。このように「まで」が助詞の下位分類において多様に現れることは他の助詞ではみられない特徴であるとも言える。

本稿では「まで」が格助詞であるか副助詞であるかもしくは他の助詞であるかということについての決着をつけようとは思わない。しかし、「まで」が他の助詞ではみられない独特な接続の仕方と特に、動詞連体形を直接受けるということに着目し、「まで」の接続関係を中心に調べることにする。特に「動詞連体形+まで」の形を取る文を考察することによって、いままで分類されてきた「まで」の用法を一つに納めることができる根拠になるのではないかという希望が本研究の目的である。

3. 「まで」の用法

3.1 格助詞用法

「まで」が格助詞用法として用いられた例文を挙げてみると

奥津敬一郎(1966『捨遺 日本文法論』)

- (1) 御用の方は係までお申し出下さい。
- (2) タクシーで新宿までいきました。

鈴木 忍(1978『教師用日本語教育ハンドブック③ 文法I助詞の諸問題』)

- (3) 手紙を会社まで届けました。
- (4) 荷物を駅まで運びます。

時枝誠記(1950『日本語文法』口語編)

- (5) どこまで行くのですか。
- (6) 夏まで続ける。

のように時間や場所の限界点を表す意味に限って現れる。

以上の例は少なくとも格助詞相互重ならない点や体言に接続し、後ろの述語を修飾する機能を持っていることで「まで」を他の格助詞と同じように扱っていると思われる。

また、奥津(1966)は「新宿まで行ってください。」の「まで」を同じ到達点、目標点を表す「へ」、「に」と置き換えても文の実質的意義に違いはないと述べている。

鈴木(1972)も「銀座へ行ってください。」、「銀座に行ってください。」、「銀座まで行ってください。」の三つの例を比較して「へ」、「に」、「まで」が述語の表す事柄の成立に参加する対象という点で「まで」を「へ」、「に」と同じように格助詞として扱っている。この論理から考えると(1)から(5)の「まで」はすべてが他の格助詞で置き換えることができるようになる。つまり、このような用法において「まで」は潜在的に格関係を含むのであると思われる。例えば、格関係を考える場合、「彼まで来た。」の「まで」は主格(が)「彼まで殺した。」の「まで」は目的格(を)というように「まで」が主格、目的格その他を表しうる。そしてそのような格関係に副次的意味を副えているわけである。このような「まで」の用法が場所や空間

や時間を表す語に付いて後ろの用言が継続性を表すという特別な場合に限って、いわゆる格助詞の意味が現れるわけである。(例：東京まで行く。)

格助詞は、一般に、体言あるいは体言に準ずる語に付いて文節を作り、その文節が同じ文の中の他の語や文節に対してどんな関係に立つかを示す(つまり、論理的関係を表す)ものである。この格助詞の定義を考えた上で、他の典型的な格助詞、副助詞の文と「まで」の文を比較してみると、

- 新宿へ行きました。
- 新宿だけ行きました。
- 新宿まで行きました。

上の三つの文は、鈴木の論理通り、「新宿へ行った。」という事実、要するに、述語の表す事柄の成立に参加する対象になるということは確かである。しかし、ここで「へ」が格助詞、「だけ」が副助詞であることは当然なことであると思うが、「まで」を格助詞に含ませるのは、少々無理があるのではないかと感じられる。

- 新宿まで行きました。
- 新宿だけ行きました。

上の二つの文において、「まで」と「だけ」は、潜在的に格関係を示す上(他の格助詞「へ」、「に」で置き換えることができる。)、さらに、後ろの用言をより細かく言い分け、限定修飾する機能を果たしているので、「まで」と「だけ」は「へ」と違う副助詞なのである。

以上、「まで」について調べて分かった結果として、いわゆる格助詞用法のうち、

- A. 「まで」自体に格関係が現れる場合(他の格助詞で置き換えることができる。)
- 学校まで行く。
 - 新宿まで行きました。
 - 手紙を会社まで届けます。
- B. 「まで」自体に格関係が現れない場合(他の格助詞で置き換えることができない。)
- 8時まで働く。
 - 夏まで続ける。
 - 雨がやむまでここで待とう。

のようにA、Bが考えられる。A、Bいずれも場所、時間、空間を表す語に「まで」が付いて後ろの用言が継続性を表すという特別な用法に限ってA、Bのケースが生じるわけである。「まで」の格助詞用法において、「まで」自体の中心的用法や意味機能は、格関係を表すと同時に+α(後ろの用言を限定修飾する他の副助詞と同じ機能を果たす。)的概念を持っているわけである。

3.2 「まで」の副助詞用法

- ・君がそんなにまで親切にするのは、かえって彼にためにならないと思う。 (基, p.959)
- ・ところがこういうものすべてが母親までが旅の話をしろとせがんでいるのだ。 (潮, p.153)
- ・絃の調子を整えてかかる必要があるので一つ弾けるようになるまでが容易でなく独り稽古には家の真ん前に出掛かるまでに、数秒時間の余裕を生じた。 (雁, p.11)

以上の例の「まで」は単に「まで」の有する意味が到達点や限界点を客観的に表す用法だけではなく、強調、添加、極端の意味を有する(話し手の主観的態度を表す用法。)点、他の格助詞と相互接続ができる(格助詞と前接、後接が可能である。「をまで」、「までを」、「までが」など。)点、動詞連体形を直接受けることができる(「まで」が動詞連体形を受けて、主語、連体修飾語、連用修飾語など色々の文節を作る。)点などで、格助詞とは違う副助詞の性質がみられる用法である。

副助詞は、格助詞とは違って、一定の語に付くものは少なく、体言、用言、その他の語に付いて文節を作り、その文節は、用言や活用連語から成る他の文節に係るものが多く、また、他と対等の資格に立つものもある。すなわち、「まで」は体言、用言、副助詞、あるいは格助詞などと接続して下に来る用言の動作作用の仕方、状態の在り方など、その表現的意味をより細かく言い分け限定する機能を果たしているわけで、副助詞なのである。

これらの例は多くの研究者が認める用法で、ここではそれ以上の分析をする必要はないと思う。

3.3 他の助詞用法

沼田(1986)は「まで」を格助詞、順序助詞、形式副詞、とりたて詞のように4つに分類している。

《順序助詞》

- 9時から5時まで勤務時間中です。
- 大阪から東京まで新幹線に乗った。

「から」、「まで」で一定の順序集合を示す機能を持っているので格助詞と区別される。

《形式副詞》

- 法にふれないまでも道義的責任は大きい。
- 彼は3年間で見違うまで(に)強くたくましくなった。

「までも」、「までに」が全体で述語を修飾する副詞句として働いていることから、「まで」を形式副詞とする。

《とりたて助詞》

- 更に、特売をするという珍現象までが起った。
- 釣の趣味の第1位にまで引き上げた。

「まで」は文を構成するには任意の要素でありながらも、「まで」がなくても文は成立する。

以上のように「まで」は研究者によって格助詞、副助詞、順序助詞、形式副詞、とりたて詞などに分類されていることが分かる。このように「まで」にいろいろな分類が現れることは、たぶん「まで」の有する意味が到達点、限界点を客観的に表す用法だけではなく、強調、添加、極端などの意味を持っている(話し手の主観的態度を表す用法。)からではないかと思う。本稿では多くの研究者によって下位分類された「まで」を副助詞に一貫して処理する。その理由として、「まで」には格助詞、副助詞以外、適当な新しい品詞がないことは明らかであり、「まで」のために新しい品詞を立てるということは、文法の性格上難しいし、また助詞の体系性を崩すことになる点、それに副助詞は自体の持っている意味は副える助詞であることを考え、本稿では「まで」を格助詞、副助詞の2つのカテゴリーに分けて考える。

3.4 「まで」の接続

助詞は、付属語として活用をしないし、助詞単独で文節が形成できないわけで、常に体

言あるいは用言、その他の自立語に接続して文節を作る。助詞の接続ということは、助詞が文中でどのような品詞のどのような形の前後に立ちうるかということで、他の語への接続が文中でいかなる文法上の位置を占めうるかということをも明らかにするものである。つまり、助詞の接続の仕方に重点を置くことによって、助詞の下位分類(副助詞、格助詞、接続助詞、終助詞など)が判明するのである。ここではまず、「まで」に現れる多様な接続の仕方について調べてみる。

(1) 名詞に接続

- この前のとき、彼がリーサさんを家まで運んでくれたんですよ。 (か、 p.192)
- しかし、文法、とくに語順まで変わってしまうことはどうしても想像を絶します。 (隣、 p.128)

(2) 代名詞に接続

- 老人がここまで言いかけると、社子春は急に手をあげて、そのことばをさえぎりました (社、 p.166)
- それとも！金は、もうちょっとで、わしまで紳士にしようとしたのじゃ。 (O、 p.151)

(3) 助数詞に接続

- 授業はひと通り済んだが、まだ帰れない、三時までぼつねんとして待ってなくてはならん。 (坊、 p.27)
- 直垂の下に利仁が貸してくれた、練色の衣の綿厚なのを、二枚まで重ねて着こんでいる。 (羅、 p.45)

(4) 動詞に接続

- お母さんが帰るまでだいじょうぶ? (と、 p.82)
- 子供については、男は七歳、女は九歳になるまで母親が養うことになっている。(民、 p.45)
- その一方で、大学を卒業するまで、料理教室にも積極的に行った。(か、 p.14)
- 子供については、男は七歳、女は九歳になるまで母親が養うことになっている。(民、 p.45)

「まで」が格助詞であるか副助詞であるかという分類区分をする上での一つの判断材料として、「動詞連体形+まで」の形を取る文を挙げることができる。それは、他の格助詞が動詞連体形を(一般的には)直接受けることができないのに対し、「まで」の場合は、その形が可能である。

(5) 助動詞に接続

- 事実は知れないまでも、いちばんもっともらしく思われる理由は、日錚和尚の説教が、夫や子に遅れた母の心へ異常な感動を与えたことです。(社、p.185)
- その手で抱き起されるまでもなく、呻り声を洩らすと殆んど同時に、鍛冶はまるで酒にでも酔ったかと思うような、覚束ない身のこなじて、徐に体を起しました。(羅、p.97)

(6) 形容詞に接続

- ただ、稲妻のひらめくたびに、波の逆立った水面が、一瞬間遠くまで見渡された。(社、p.16)
- 中南米の人のように、夜遅くまで遊び長い休暇をとり、人びとの関心がいつも遊ぶことや休暇の計画ばかりに向けられていたならば国民の経済は成長しにくい。(民、p.140)

(7) 接続助詞に接続

- ああ、私は、女と云うものは、自分の夫を殺してまでも、猶人に愛されるのが嬉しく感ぜられるものなのだろうか。(羅、p.74)

(8) 格助詞に接続

- 墓場へまで一緒にもっていかぬない、その種の女の唯一の悪趣味、唯一の夢なんだが。(金、p.114)
- もし加害者が某検校にあらずして某女師匠であったとすれば器量自慢までが面憎かったに違いないから彼女的美貌を破壊し去ることに一層の快味を覚えたであろう。(春、p.63)
- ところがこういうものすべてが母親までが旅の話をしるとせがんでいるのだ。(潮、p.153)
- そんなにまで急いでどうして帰らなければならないのだろう。(自、p.174)
- 改めて三本勝負をいたされるか、それとも拙者が殿への申しわけに切腹しようかとまで激語した。(社、p.31)

上の例のように、「まで」は他の格助詞と自由に前接、後接して「まで」の文全体がそれぞれ、主語、連用修飾語、連体修飾語などの多様な文節を作るわけで、典型的な格助詞とは区別できる。「まで」特有の接続の仕方である。「まで」が格助詞(へ、が、と、になど)と接続して、成り立った格関係の上に、さらに、強調の意味を持ち、全体で下の用言に係る(意義を限定するなど)ので副助詞の働きをしていると思われる。

(9) 副詞に接続

- やがて、「そうまでして、まだ見捨てられたくないと思うか」私は答えなかった。
(金、p.187)
- 己はそうまでして、女に媚びるあの男をいじらしく思うのだ。
(羅、p.67)

(10) 形容動詞に接続

- 相手が自分を信頼していないから、自分の利益を守るためには、厚顔なまでに主張しなければならぬ。
(民、p.135)
- 死と隣り合わせでスピードを追求するこのスポーツで、セナは残酷なまでに自分を駆り立てた。
(ニュー、p.58)

以上のように、「まで」の接続関係を調べた結果、名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、助詞などと接続できる多様な接続の仕方があることが分かる。つまり、「まで」は、他の格助詞(格助詞の場合、体言あるいは体言に準ずる品詞に接続する。)とは違う接続の仕方を有することが分かる。ところが、接続の仕方だけで「まで」が格助詞であるか副助詞であるかということは、判定しにくい点であると思われるが、確かなのは少なくとも「まで」には他の格助詞でみられない接続関係が現れる点である。

以上、「まで」の接続関係を調べた結果、次のように三つにまとめることができる。

1. 他の格助詞に比べ、多くの品詞に接続する。
2. 動詞連体形と無作為に接続できる。
3. 格助詞との相互接続(前接、後接)が可能である。

「まで」の接続関係で現れる上の三つの特質は、「まで」が格助詞よりも、いわゆる副助詞の接続関係に近い用法であることを示している。

4. 動詞連体形+「まで」

4.1 動詞連体形+「まで」の意味

ここでは、「動詞連体形+まで」の形の文を意味も加えて(意味が品詞分類のために一つの

役割を果たすから)調べてみる。

1. 時間の限界を表す

- 今日は服むのをみるまで働きませんよ。 (自, p.145)
- 私が来るまで、この病室の受持医は吉田先輩であった。 (自, p.82)

2. 場所・空間の限界を表す。

- ここからだ、自転車なら病院まで一時間もかからないでいけるからね。 (と, p.66)
- それには「オードヴル」にはじまり、最後の「外套や傘をお忘れなく」という文字にいたるまで、料理の品目が、それぞれきちんと適切に、見る人の食欲に訴えかけるように美しくタイプされていた。 (O, p.58)

3. 程度の限界を表す。(「までもない。」慣用的表現)

- 怒り狂った素戔鳴にさえ、問うまでもなく明らかであった。 (社, p.89)
- 無知については、もはや繰り返すまでもありません。 (隣, p.28)

4. 文末に用いられモダールな意味を表す。

- いやなら、ここをやめるまでだ。 (基, p.959)
- あなたならわかると思って、ちょっと聞いてみたまでです。 (基, p.959)

上のように動詞連体形を受ける「まで」の意味は、四つのタイプに分けることができる。

ここで問題になるのは、連体形の場合、体言に繋がるのが主な用法であるから「動詞連体形+まで」の場合も、意味上の上で考えると「動詞連体形+まで」=「動詞連体形+形式名詞+まで」であることが考えられる。要するに、「動詞連体形+まで」において

1. 時間を表す場合(とき)
2. 場所・空間を表す場合(ところ)
3. 程度・モダールを表す場合(こと)

はそれぞれ、みるまで=みる-とき-まで、いたるまで=いたる-ところ-まで、繰り返すまで=繰り返す-こと-までのように表すことができる。つまり、動詞連体形と「まで」の間に「とき」、「ところ」、「こと」という形式名詞を入れて表現することができる。この場合、「動詞連体形+形式名詞+まで」の文よりも「動詞連体形+まで」の方がより自然な語感を表している。また、「まで」の場合、

(○)食べるときまで ⇔ (○)食べるまで

のように形式名詞を入れるても省略しも差し支えない。

しかし、他の格助詞の場合、

(○)食べるときが ⇔ (X)食べるが

(○)食べるときを ⇔ (X)食べるを

(○)食べるときに ⇔ (X)食べるに

のように格助詞における形式名詞の省略は不可能である。

上の例で分かるように「まで」において形式名詞が省略できるとことは、他の副助詞においてもみられる。例えば、

- 毎日、うちから駅まで歩くだけでも、いい運動だ。 (基, p.567)
- あなたが大声を出したばかりに、子どもが泣き出してしまった。 (基, p.815)
- 外国で病気をするくらい心ぼそいことはない。 (基, p.306)

以上の「だけ」、「ばかり」、「くらい」の副助詞は「まで」と同じように動詞連体形に直接接続ができるし、動詞連体形と「だけ」、「ばかり」、「くらい」の間に「こと」という形式名詞を入れることが可能であるから、「まで」の接続関係との共通性がみえるわけである。つまり、「まで」が動詞連体形を無作為に受けられることは、副助詞の性質を示していると言える。

以上のように「まで」の場合、形式名詞が省略できるということは他の格助詞とは違う用法として「まで」の副助詞性が強くみられることである。特に、「動詞連体形+まで」の意味分布において時間の限界を表す用法が広く用いられるわけであるが、これは動詞自身に時間的プロセスを表すからである。場所・空間の限界を表す場合は「いたる」、「達する」のような動詞と接続して稀に用いられる用法である。

4.2 「動詞連体形+まで」の機能

- ~弾けるようになるまでが容易でなく独り稽古には~ (春, p.63)
- ~武士のみならず庶民にいたるまでの生活様式、道徳、物の考え方に影響を及ぼしたことであり~ (隣, p.63)

- ・彼の正義感はだんだん高じて来て、明日は、私のために、ぜひとも老師に対して釈明してやると息巻くまでになった。(金、p.63)
- ・いやならここをやめるまでだ。(基、p.959)

以上のように「まで」が動詞連体形を受けることによって「まで」の文節全体が体言化され、文の中でそれぞれ、主語、連体修飾語、連用修飾語、述語を作って後ろの用言に係って用言の表す動作状態の程度とか様子を限定することで副助詞の機能を果たしている。

4.3 「体言＋まで」の文と「動詞連体形＋まで」の文との比較

- (1) 学校まで行く。
- (2) 彼が来るまで待つ。
- (3) 8時まで働く。
- (4) 夜の開けるまで話す。

上の例は格助詞

用法として用いられた場合である。しかし、ここでは、これらを副助詞として一貫して処理する。その理由として(1)、(3)の場合、前の体言が後ろの用言に係るのは格助詞と似ている働きをしているが、体言と用言との格関係を表すことが主たる機能ではなく、後ろの用言を限定修飾する他の副助詞と同じ機能を果たすからである。また、(2)、(4)の場合は連体形を受けることによって「まで」の文節全体が体言化され、副助詞の性質が現れるわけである。ところが、(1)においては前で述べた通り「まで」自体が格関係を含んでいるのに対して、(2)、(3)、(4)では格関係が現れない。つまり、「まで」には自体の中に格関係が現れる場合と現れない場合とで分かれるのである。

5. おわりに

以上、簡単に助詞「まで」について調べて分かった結果として、接続の仕方は

1. 多くの品詞に接続する。
2. 動詞連体形と無作為に接続できる。
3. 格助詞と相互接続(前接、後接)

のようにまとめることが可能である。

「まで」の接続関係で現れる上の三つの特質は、「まで」が格助詞よりも、いわゆる副助詞の接続関係に近い用法である。

また、「まで」の格助詞用法のうち、

- A. 「まで」自体に格助詞用法が現れる場合
格関係が認められるもの。(例：学校まで行く。)
格関係が認められないもの。(例：8時まで働く。)
- B. 「まで」自体に格助詞用法が現れない場合
夏まで続ける。

上のように二つに分けて考えることができる。いずれも場所、空間、時間を表す語に「まで」がついて後ろの用言が継続性を表すという特別な用法に限ってこのケースが生じるわけである。換言すれば「まで」自体の中心的意味や用法は格関係を表さない副助詞の用法であると思われる。また、「まで」が他の格助詞では一般にみられない動詞連体形を無作為に受けられるということは格助詞とは違う用法として「まで」の副助詞性がみえることでもある。

以上、「動詞連体形+まで」の形を中心にすえて、「まで」の接続関係の用法を考察した結果、「まで」の一般的性格は副助詞に属するのではないかと思われる。

助詞「まで」の接続関係だけで副助詞に属すると断定することは無理があると思うが、すくなくとも他の格助詞ではみられない接続の仕方の特徴が現れることは確かである。

【参考文献】

- 奥津敬一郎(1966)「「マデ」、「マデに」、「カラ」一順序助詞を中心として」『日本語教育』9
 _____(1986)『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
 _____(1996)『拾遺 日本語文法論』ひつじ書房、pp.24-26
 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞助動詞一用法と実例』国立国語研究所報告3、秀英出版
 此島正年(1966)『国語助詞の研究 一助詞史の素描一』桜楓社
 鈴木一彦(1976)『日本文法本質論』明治書院
 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
 鈴木 忍(1978)『文法 I 助詞の諸問題』凡人社、pp.142-149

- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
時枝誠記(1950)『日本文法口語編』岩波書店
沼田善子(1986)『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社、pp.186-192
橋本進吉(1969)『助詞助動詞の研究』岩波書店
松尾捨次郎(1961)『国語法論考 追補版』白帝社
松村 明(1973)『日本語文法大辞典』明治書院
村田孝次(1984)『日本の言語発達研究』培風館
森田良行(1980)『基礎日本語2』角川書店
藝崎淳子(2002)「助詞「まで」の意味機能に関する考察」『日本文化』Vol.14
山田孝雄(1908)『日本文法論』宝文館
韓奎安(2010)「日本語助詞「まで」의 統攝的 機能과 意味에 관한 고찰」『日語日文學』第48輯 大韓日語日文學會、pp.163-181

【用例出典】

- 芥川竜之介(1968)『羅生門・鼻』新潮文庫
_____(1968)『社子春・南京の基督』角川書店
大久保康雄訳(1969)『O.ヘンリ短編集』新潮文庫
岡崎久彦(1983)『隣の國で考えたこと』中公文庫
竹内 宏(1979)『民族と風土の経済学』角川書店
谷崎潤一郎(1976)『春琴抄』角川文庫
夏目漱石(1968)『坊っちゃん』講談社
三島由起夫(1960)『金閣寺』新潮文庫
宮崎 駿・久保つぎこ(1988)『となりのトトロ』徳間書店
群ようこ(2008)『かもめ食堂』幻冬舎
森 鷗外(1948)『雁』新潮文庫
渡辺淳一(1975)『自殺のすすめ』角川書店
三島由起夫(1955)『潮騒』新潮文庫
文化庁(1979)『外国人のための基本語用例辞典』大蔵省印刷局
CCCメディアハウス(1994.5.18.)『ニューズウィーク日本版』

논문투고일 : 2016년 09월 20일
심사개시일 : 2016년 10월 18일
1차 수정일 : 2016년 11월 08일
2차 수정일 : 2016년 11월 08일
게재확정일 : 2016년 11월 15일

 <要旨>

助詞「まで」の接続機能

- 「まで」の副助詞性について -

韓鐸哲

一般に、助詞「まで」は品詞分類において格助詞または副助詞あるいは他の助詞として分類され、しばしば品詞分類上の論点になっている。確かに「まで」には以下の2つの用法がある。

1. 格助詞的用法：8時まで働く。東京まで行く。
2. 副助詞的用法：彼まで来た。命まで捨てるとは思わなかった。

1の「まで」は客観的に時間や場所の限界点を示す格助詞的用法として用いられている。一方、2の「まで」では、叙述内容に対する話し手の主観的態度が表現され、ムードと係る副助詞的用法として用いられている。すなわち、「まで」は、意味的分類に対応して、格助詞的用法と副助詞的用法に分かれる用法の違いが現れる。つまり、二元的に分類される特殊性がみられる。

「まで」には他の格助詞でみられない三つの接続関係が現れる。

1. 大部分の品詞に接続する。
2. 動詞連体形と無作為に接続できる。
3. 格助詞と相互接続(前接、後接)が可能である。

「まで」の接続関係で現れる上の三つの特質は、「まで」が格助詞よりも、いわゆる副助詞の接続関係に近い用法である。

また、「まで」の中でも場所、空間、時間を表す語に「まで」がついて後ろの用言が継続性を表すという特別な用法に限ってこのケースが生じるわけである。換言すれば「まで」自体の中心的意味や用法は格関係を表さない副助詞の用法であると思われる。また、「まで」が他の格助詞では一般にみられない動詞連体形を無作為に受けられるということは格助詞とは違う用法として「まで」の副助詞性がみえることでもある。

A Study on connection functions of Japanese particle [MADE]

- On the adverbiality of Japanese particle [MADE] -

Han, Tak-Cheol

In general and pertaining to parts of speech, the postpositional word MADE is categorized as case makers or adverbial particles in regards to the types of particles and therefore has been an issue in particle categorization from time to time.

The word MADE clearly has two following usages:

1. Case makers usage: I work until eight. I go until I arrive to Tokyo.
2. Adverbial particles usage: He came up to. I did not think you would give up your life.

In MADE 1, the case makers usage is used to indicate a time or place as a limit. On the other hand, in MADE 2, the adverbial particles usage includes speaker's objective attitude and is being used in relation to the mood. In other words, in response to the categorization meaning of MADE, there is a difference between case marker usage and adverbial particle usage. In short, it is categorized dualistically way.

There are three connective relationships shown in MADE that are not present in case markers.

1. It joins most parts of speech.
2. It joins part of sentence structure where a noun comes after a verb.
3. It can be joined with case markers.

There is a special distinctiveness in MADE's connective relationship which shows that MADE is closer to the adverbial particles part of speech than the case markers.